

一、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。なお、文中の言葉の下の「」の中はその言葉の意味とする。

上田一郎はボランティアの「勉強会」で作文の書き方を指導している。直哉は生徒の一人である。

直哉の作文にはかつてなかった感情の飛沫〔飛び散る水滴〕がきらめきはじめている。書かれているのはもっぱら母親やクラスメイトとのやりとりで、他愛のない一齣ながらも、そこには素朴なおかしみがある。風呂の温度で見栄を張りあう友達が直哉にいたことも一郎をほっとさせた。

が、それにしても――。

「ばかやろう、おらあ、うそなんかつくか。そいだったら、なんでい、四十六どはうそで、四十五どはほんとか。四十六どはうそで、四十四どはほんとか」

これには一郎も首をひねらずにはいらなかった。

直哉のセリフとして書かれているそれは、あきらかに平素の彼の語彙〔知っている言葉〕にないものだ。まさか、勉強会ではおとなしくしていても、友達の前ではそんな口をきいているのか。どうにも想像しがたい。

いぶかる一郎をなおも惑わすように、その後も直哉の作文には奇怪な言いまわしが頻出した。

「それ見ろ、おれの言わんこっちゃねえ」

「なに言いやがんでえ、こんちくしょう」

「チッ、ふざけたまねしやがら。じようだんこっちゃねえよ」

いよいよべらんめえ口調が極まるに至って、一郎はようやくはたと気づいたのだった。

「これは豊田正子の父ちゃんだ」

そう、直哉は正子の綴方^{つづりかた}①にトウジョウする父親の口ぶりを真似^{まね}ていたのである。

貧^{まず}しくとも懸命^{けんめい}に職を求めて働き、苦境にある知人には惜しみなく手をさしのべる任侠^{にんぎやう}の徒^{また}「弱い人に手をさしのべるような人」、正子パパ。短気ながらも憎めないその愛嬌^{あいきやうもの}者が威勢よく吐きだすセリフの数々を、どうやら直哉は気に入ったらしい。

「直哉。もしかして、正子ちゃんのお父さんのしゃべり方、真似してる？」

本人に確認したところ、直哉はぼつと頬^{ほお}を染^そめてうなずいた。

②「イカしてるからね」

直哉いわく、ジッサイ^{くちよう}③にべらんめえ口調で友達をどやしつけたことはなく、皆^{みな}の前で言ってみたくとも言えない、その欲求不満を作文にぶつけていたようだ。

「だよな」

「でも、ちよつとずつ、言う練習もしてる」

④「いや、書くだけにしとけって」

リアル世界での適用には難色を示した一郎も、こと作文に関してはとやかく言わず、その後も直哉の好きにさせることにした。母親と二人暮らしの直哉が正子パパにある種の父親像を重ねているのなら、それをとりあげたりはしたくない。現実^{現実}に求められない何かを作文の中に求める、それもまた一つのモチベーション^{モチベーション}「やる気」であっていいと思った。

だからこそ、ある日突然、「新川洋子と申します」と直哉の母親からかかってきた電話で、それが裏目に出^でたと知ったショックは⑤

並大抵^{なみたいてい}でなかった。

「勉強会で何を教わっているのか知りませんが、最近、うちの子の言葉づかいがどんどん粗野^{そや}になってます。学校のお友達から、直哉が先生にまでへんな口をきいてるって聞いて、愕然^{がくぜん}としました」

そんな子じゃなかったのに、と洋子は涙声^{なみだこゑ}で訴^{うった}えたのだった。

「これが原因で何かあったらどうしてくれるんですか。何があっても、うちの子は公立学校でお世話になるしかないんです。お友達や先生とうまくいかなかったからって、私立へ転校させる余裕^{よゆう}はうちにはないんです。無料^{むりよう}でホシユウ^{ホシユウ}⑥をしていただけなのはありがたかったけど、もう、ここまでにしてください」

直哉を退会させる。⑦そうダンゲンした洋子は、もはや一郎が何を言っても耳を貸そうとしなかった。息子^{むすこ}が学校で浮いてしまったら。クラスでいじめられたら。不登校になってしまったら。悪いほうへ悪いほうへと肥大化^{ひだい化}していく想像が、彼女をひどく頑^{かた}なにしているようだった。

「お母さん、お願いします。せめて直哉と話をさせてください」

「いいえ、もううちの子にかまわないでください」

話半ばで電話を切られたその週の日曜日、祈^{いの}る思いで待っていた直哉は勉強会に姿をあらわさなかった。

よかれと思って薦^{すす}めた『綴方教室』^{すず}（本の題名）が仇^{あだ}となった。逆に悪^あしき影響^{えいきやう}を与え、直哉を粗野^{そや}にしてしまった。

一郎にとってそれは痛恨^{つうこん}の極みだった。そこまで考えが及^{およ}ばなかった自分の浅慮^{せんりよ}をどれだけ恨んでも事足りない。と同時に、しかし、彼には直哉の変化を「悪^{わる}しき感化」の一語ですましてしまうことへの抵抗^{ていこう}もあった。

本当にそうなのだろうか。豊田ファミリーが直哉にもたらしたのは、荒^あつぱい言動だけなのか。一連の作文に刻^きまれた変化^{へんか}の軌跡^{きせき}⑧

をふりかえるほどに疑念が募^つっていく。今の直哉はむさぼるように言葉を吸収していく成長過程にある。べらんめえ口調はその道筋でひろった正子パパからの借りものであり、焦^{あせ}らず長い目で見守つてやれば、遠からずもつと似つかわしい彼自身の言語を獲得^{かくとく}できるのではないか。そんな思いがすてられない。

しかし、それを伝えようにも、宅配^{さし}寿司と電話案内のパートをかけもちしている母の洋子は忙しく、電話をしてもとりつく島がない。今の彼女にとっては、学校^⑨でのトラブルから息子を守ることが最優先事項であり、一郎が説く作文の効能にまでは頭がまわらないようだ。警戒心^{けいかいしん}をあらわに一郎を疎^{うと}み、もう息子にかまわないでくれとくりかえすばかりである。

「どうしても直哉くんに代わってもらえないのなら、ぼく、これからお宅へうかがいます。直接、話をさせてもらいます」
埒^{らち}の明かない言い合いに痺^{しび}れを切らした一郎は、ついにある日、抑^{おさ}えきれない焦慮^{しやうりょ}「あせる気持ち」をこめて洋子につめよった。
ハツと息を呑^のむような間のあと、彼女はかすれた声を返した。

「あなたに、そんな権利があるんですか」

その声に滲^{にじ}んでいたおびえの色が一郎を我に返らせた。

権利。俺^{おれ}にそんなものがあるのか。この母が守ろうとしている一線をこえる権利が？ 俺^⑩はそれほどのものなのか？

(中略)

一郎は今日の授業を終えて片付けをしている。

「直哉！」

一郎はとつさに椅子^{いす}を引き、床^{ゆか}をギギツとうならせた。

目を疑う。が、まちがいない。直哉だ。いつも着ていた紺色^{こんいろ}のダウンジャケット姿で気まずそうにうつむいている。目の前まで来るとちらりと一郎の顔を見上げ、すぐにまた頭をたれた。

「直哉」

いまだ何が起こったのかわからない一郎の前で、もう一つの影も足を止める。

深緑のセーターにグレイのジャケットをはおった化粧^{けしょう}つ気のない短髪^{たんぱつ}の婦人だった。

「上田先生……」

「あ」

「よかった、間に合って」

胸に手を当ててひと息つくなり、婦人は深々と腰^{こし}を折りまげた。

「ごぶさたしております。直哉の母でございます」

一郎はいよいよ混乱^⑪し、声^{こゑ}の出ない喉元^{のどもと}をひくつかせた。直哉の母、新川洋子。私たち母子にかまわないでくれと自分を拒^{こは}みつづけた人。

「息子がお世話になっております。先だっては大変失礼いたしました。あの、じつは、今日は折りいって上田先生にお話ししたいことがありまして」

張りつめたその声を、「待つてください」と背後からさえぎったのは、阿里「一郎と一緒に指導しているボランティア」だ。

「お母さん、直哉が……」

「はい？」

「直哉が、自分でしゃべりたそうな顔をしています」

洋子と一郎が同時に直哉へ目を落とす。ふいの注目に少年はごくんと喉を鳴らしてかたまるも、しゃべれるのかと洋子に問われると、もじもじしながらもうなずいた。

「上田先生、あの、ぼく」

「ん？」

「あのう、ぼく……」

「どうした、直哉」

「ふらつく瞳ひとみを支えるように、一郎は腰をかがめた。言いたいことをうまく言えないじれったさは痛いほどわかる。焦あせらなくていいよ。ゆっくりでいいから、言ってごらん」

「ぼく、この前、学校でテストがあつて」

「うん」

「点数が、うんと、あがつてて」

「ほんとか？」

「国語も、算数も、理科も、ぜんぶあがつてて」

「すごいじゃないか、と言いかけた一郎を次なる直哉の声が止めた。」

「そしたら、みんなに、カンニングしたつて言われて」

「え」

「してないつて言っても信じてくれなくて、先生もぼくを疑つて、正直に言つたら怒おこらないから言いなさいつて言われて」
「そんな……」

一郎の顔から血の気が引いていく。

「だから、だから……」

懸命にしゃべりつづける直哉の頬は果実のように赤い。

「だから、ぼく、先生に手紙書きました」

「手紙？」

「ぼくはカンニングしてませんつて。先生は正直に言つたら怒らないつて言つたから、ぼくはそれがすごいやだったし、先生は怒らなくても、ぼくは先生に怒つてゐるつて」

「そう手紙に書いたのか」

「うん。そしたら、そしたら……」

いよいよ顔を真っ赤にした直哉の唇くちびるが震える。泣きだすのかと思つたら、次の瞬間しゅんかん、直哉はこらえかねたように身をくねらせ、ニツとした。

「そしたら、先生が、謝つてくれた」

「え」

「疑つてごめんねつて、先生が、ぼくに、謝つてくれたんだよ」

かつて聞いたことのない晴ればれとした声に、中腰の姿勢を保っていた一郎の膝ひざから力がぬけた。はーっと息を吐きながらその場

にへたりこんだ彼に、「すみません」と直哉に代わって母の洋子が口を開いた。

「私、とんでもない思いちがいをしていました。直哉の口が悪くなったとお友達から聞いて、すっかりうろたえてしまったんですけど、担任の先生はもとおおらかに直哉を見てくださっていたんです。言葉づかいが多少おかしくても、^⑬直哉が自分を表に出しはじめたのを喜んでくださっていたそうなんです。二学期とくらべてあまりに点がのびたものだから、カンニングの件もつい疑ってしまったけど、直哉からの手紙がすごく嬉しかったと言ってくださいました」

目の縁ぎりぎりに涙を留めたまま、洋子は「先生」とまっすぐ一郎を見つめた。

「私、親だから、わかるんです。うちの子は……直哉は、筆で自分の気持ちを人さまに伝えられるような子ではありませんでした。少なくとも、クレセント「勉強会の名称」のお世話になるまでは」

「お母さん……」

「テストの点数があがったことよりも、私には、それが嬉しくて」

白い頬を一筋の涙が伝う。二筋目は許さじとばかりに洋子は瞬きを止め、^⑭気丈に声を張った。

「ありがとうございます。直哉に、力を与えてくださって」

深々と低頭した彼女が発したその一語を、そのうち、一郎は幾度となしに頭によみがえらせることになる。弱気になるたび、逃げてなくなるたびに、くりかえしくりかえしこの日のこの場所へ舞いもどつてくることになる。そして、その都度、教え子の母が我知らず彼に与えた天啓「天からのありがたい声」のような気づきを反芻「くりかえし思い出す」するのだった。

教育は、子どもをコントロールするためにあるんじゃない。

^⑮不条理に抗う力、たやすくコントロールされないための力を授けるためにあるんだ――。

けれど、この時点ではまだそこまでは思い至らず、泣き笑いのような顔で直哉の頭をなでるのが精一杯だった。

「直哉。おまえ、すごいな。イカしてるよ」

直哉は唇の上にてからせた涙をすすりあげて笑った。

「あたぼうよ」

(森絵都「みかづき」より 一部表記・体裁を改めた)

問一、——②「イカしてる」とありますが、直哉は正子の父親のどのようなところを「イカしてる」と思っているのですか。それがわかる表現を含む一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問二、——④「いや、書くだけにしとけて」とありますが、一郎がこのように言った理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 荒っぽい言葉で不満を解消するのは間違っていると考えているから

イ 荒っぽい言葉は大人として注意しなければならぬと考えているから

ウ 荒っぽい言葉を使うと周囲を混乱させてしまうと心配しているから

エ 荒っぽい言葉をみんなの前で使うとはやっしてしまうと心配しているから

問三、——⑤「裏目に出た」とありますが、一郎が何をすることが裏目に出たというのですか。それがわかる一文を文中から探して、最初の五字を答えなさい。

問四、——⑨「学校でのトラブルから息子を守る」とありますが、このためにとつた母の行動を言い表している一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五、——⑩「俺はそれほどのものなのか」とありますが、この説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 無理に直哉を勉強会に來させて、何かあった場合に責任がとれるのかということ

イ 強引に直哉に作文を続けさせることで、学校でのトラブルから守れるのかということ

ウ いくら直哉のためとはいえ、母親の考えを無視した行動をとってもいいのかということ

エ 自分の考えを押し通すために、これ以上母親を不安にさせていいのかということ

問六、——⑪「声の出ない喉元をひくつかせた」・⑫「こくと喉を鳴らしてかたまる」とありますが、この二つに共通する気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア とまどい イ おどろき ウ いらだち エ はじらい

問七、——⑬「直哉が自分を表に出しはじめた」とありますが、これは一郎の考える作文の効果のあらわれと考えられます。一郎の考えを言い表している連続した二文を文中から探して、最初の五字を答えなさい。

問八、——⑭「直哉に、力を与えてくださって」とありますが、この「力」とは具体的にどのような力ですか。文中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問九、——⑮「不条理に抗う」とありますが、

1 この場合どのようなことを「不条理」といつているのですか。次の文の空欄にあてはまる表現を文中の言葉を用いて、十五

字以内で答えなさい。

成績が上がったことを こと

2 直哉は抗うために具体的にどのようなことをしたのですか。文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問十、——①「トウジョウ」・③「ジッサイ」・⑥「ホシュウ」・⑦「ダンゲン」のカタカナを漢字に直し、——⑧「刻まれた」の漢字の読みを答えなさい。

二、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。なお、文中の言葉の下の「」の中はその言葉の意味とする。

建築家という職業について考える際に、まず最初に建築をつくり上げる上において本当にさまざまな要素があるということを知る必要があります。複雑なものをいろんな人との共同作業でつくるといこともそうですが、僕が大切にしたいものの一つに、いかに美しいモノをつくるか、ということが挙げられます。

① センレンされた美意識によって創出された美しい素材の組み合わせや、綺麗なプロポーションというものがあります。自然界にある植物は、説明不要に美しい。一本の樹木は、遠景における葉の茂り方も、近景で見る枝振りも、あるいは顕微鏡などで見た細胞レベルにおいてまで美しいものです。野に咲く一輪の花の美しさもまた、無条件に人の心に響くものがあります。

しかし、僕がよく想像するのは、見えているものの美しさの向こう側にあるかもしれないもう一つの世界のことです。物質的に手で触れることができるものではなく、そうしたモノに宿った「見えない世界」の美しさについて考えるようにしています。

建築家として建物を設計する際に、目に見えるモノだけを考えながらデザインするのでは、何か物足りない気持ちになることがあります。表層だけが美しくても決していい建築にはならないと思うからです。本当の美しさは、見て美しいだけでなく、五感のすべ

てに訴えかけるもの。ジッサイに、建築が完成するまでに現場で働いている建築家としては、最終形態として完成する美しいモノの背景にあった見えなくなってしまうものにも、気を配らないといけません。

つまり、表層的な美しさを支えているのは、見えなくなってしまう下地など、そのプロセス「過程」にこそ依存しているということがあるのです。それは、何か見えない法則のようなものが支えている美しさの強度かもしれません。

一例を挙げてみたいと思います。一枚の土壁が完成するのには、竹から編まれた竹小舞が下地になります。そこに、土や砂を水と丁寧に調合した粘土のようなタネを鋤で竹小舞にひっかけるようにして塗り込みます。下塗りをしたら乾かせますが、乾燥すると壁がひび割れます。下地をバリバリとひび割れさせてから、数日後に中塗りをします。また乾燥させて、仕上げのタネを塗る。とにかく手間と時間がかかる作業であるため、今では一軒丸々土壁という家をすっかり見なくなりました。物質としての土壁が、その場で呼吸をし、水分を吸収したり、放出したりしながら、左官職人の手の痕跡とともに、完成していくと独特な輝きを放つようになります。

完成した土壁には手間暇かかった竹小舞はもちろん、積層させるように丁寧に塗り重ねられた下地の壁は既に見えなくなってしまうています。ひび割れた下塗りも、もはや、いっさい見えません。しかし、そうした職人たちの思いは、必ず土壁の表面から滲み出るものです。竹小舞でなく、薄いボードの下地にわずかに数ミリの厚みでちよこつと土を塗っただけでつくられた土壁には、どうしても長い時間に耐える強度が備わりません。見せかけの美しさは、弱い。仮に、竣工「完成」当時は同じく美しく見えたとしても、しばらく時間が経つにつれてガタがきます。楽してつくられたものは、決して持続可能な美しさを獲得できないのです。

表面が一見美しいフローリングは、無垢の木材と比べて、パツと見同じように見えるかもしれませんが。その床の上を裸足ですっと過ごしてみると、木のぬくもりや、味わいなどの違いが必ず感じられます。自然素材は、硬く均質的で綺麗なフローリングと違って、

節があつたり、反つたりして、まったく平らではないこともあります。しかし、そうした自然の動きも含めて家を構成しているモノが美しいと感じられるように思っています。

料理にたとえるとわかりやすい。本当の美味しさは、手間を惜しまず準備された料理に宿るのではないのでしょうか。食卓に並べられた料理には、それを丹精込めて調理してくれた母親の思いや、その食材に愛情を注いで育ててくれた農家さんたちの痕跡はもはや見えないかもしれません。しかし、そうした不可視なものは、きつと見るのとは違った形で僕たちが感じることができると思っています。

外的な表象の美しさの有無にかかわらず、物質的なモノの世界を超えて、見えない物語へとアクセス「近づくこと」する扉をみつけた。レストランの厨房では、美味しい料理を客に提供するためにほとんどの時間は、開店前の仕込みにかかっていたりします。コンビニエント「手軽なこと」な料理は、コンビニエントな味しませんが。出汁をとったり、食材を綺麗に洗って切ったりする作業には、近道などないのです。

先に述べた土壁の例に戻ると、土壁に降り注いだ太陽の光が作り出す陰影の美しさは、見飽きることがありません。惚れ惚れする土壁を見ながら、それを塗ってくれた左官職人のことを思ったり、原材料の土があつた山の風景に想いを馳せたりするほどの、うつりする美しさというものがある。床においても、歩きながら足の裏で感じた心地よさを介して、つくってくれた大工さんや、伐られた森に想像を巡らせたい。

実際に見えるモノだけではなく、その向こう側にあるかもしれない見えないものに、建築家として対処することができないだろうかといつも考えています。その内に美しさを秘めた見えない存在を、仮に「物語」と呼んでもよいでしょう。

多重に絡み合っていく中で、見えにくくなってしまった物語を丁寧に組み上げて、空間の魅力を発見していく。物語は、見えない

のみならず、数値化もできません。しかし、そうした見えないものとの交流を通してこそ、^⑦ 本当の美は発見できると信じています。
(中略)

モノそのものは、割れたり、壊れたりしていつかはなくなる、儂い^{はかな}ものです。でも、心の目で捉える物語は、なくなることがありません。一個人をつくっている弱い現実や強い現実が多様であるように、建築家として建築を設計する上で、その場所に隠れている力や際立った特徴のないものなどの見えない何かを、いかに顕在化^{けんざいか}「形にあらわすこと」できるかということが建築家に託された大事な役割だと感じています。

どんな建築をつくる上でも、「時間」と「お金」と「技術」というトライアングル「三角形」が絶対的な条件としてあります。でもそのトライアングルだけではもちろんありません。それにいくつもの要素が物語となつて建築を強く肉付けしています。

風揚げ^{たかあ}をイメージしてもらいたいのですが、風をきれいに揚げるためには、何本もの糸の緊張関係をうまくコントロールしなければなりません。時間とお金と技術という三本の糸が中心にあるのは間違いありませんが、そのほかにも沢山の糸が建築という風に乗せています。一本が切れると全体のバランスが悪くなるように、すべての糸が絶妙^{ぜつみょう}に関係し合つてはじめて建築は生き生きするのです。

一軒の家をつくるときのトライアングルについて考えてみましょう。

お施主さん^{せしゅ}「依頼者^{いらいしや}」が、お子さんの小学校のことがあるのであと一年で家を完成させて欲しいというと、時間は優先順位の高い、とても大切な要素になります。完成時期が決まっていると、「お金」をたくさんかけて職人を普段^{ふだん}以上に呼んで、最高の「技術」を提供することで、その「時間」が守れるように努力します。逆に時間がもつとあれば、一人の大工さんがゆつくりやれる分お金は節約できるかもしれません。すべての現場がケース・バイ・ケース「その場その時に応じること」で、模範解答^{もはん}などありません。

時間、お金、技術のバランスは大事な軸^{じく}ですが、それ以外のいろいろな要素をいかにその都度最適化^{つど}していくかが課題になります。なにを発見し、なにを優先的に設計のパラメーター「要素」とするのか。このパラメーターの^⑧ シュジャ選択^{せんたく}こそ、その場所のための、その人のための、人とは違う建築をつくるための大切な判断基準になると思っています。

^⑨ 亡くなったおばあちゃんが暮らしていた部屋のこの柱は残しましょうとか、この場所から見える昼間の青空が美しいので、この光を頼りに設計を進めましょうとか。

これから家が建つ敷地^{しきち}に行つたときに、どのようなパラメーターを発見できるかは、設計者として大事な能力になってくる。敷地の歴史を知ること大切なことです。ずっとその敷地に植えられていた梅の樹を手がかりに住宅を設計することもあるでしょう。

目に見えるモノにとどまらず、その背景にある物語をすくい取る。ここに昔きれいな菜の花が咲いていたとか、小さな井戸があったとか、その場所固有の物語を場所と対話しながらみつけれないだろうか、と自分の身体感覚を研ぎ澄^とますように心がけています。

仮にクライアント「依頼者」から「この樹は切っちゃってください」と言われたとしても、「はい、そうですか」じゃなくて、「工夫すれば、この樹木も家のために生かせますよ」と考えてみる。ときにセイヤク^⑩でもあるパラメーターが、設計の突破口^{とつぽう}になることもあります。

時間、お金、技術もそうですが、パラメーターが複数になると、互いに矛盾^{⑪ じつげん}することにもなりかねません。だから、優先順位をつけるようにしています。家づくりにおいて何を一番大事にするのかを発見し、共有するためです。

自然素材の木と土だけで家をつくりたいと強く希望された時に、化学製品である断熱材をどうするかという話になったことがあります。僕は、「木と土の家をつくる」というコンセプト「意向」^{⑫ いていよう}を理解して一緒につくっていましたが、断熱材もまた快適さを求め

る上で必要です、と言いました。

しかし、お施主さんにとっては、部屋が夏に暑かったり、冬に寒くなったりすることは、構わないと。⑫なるべく自然素材だけに、徹底したい。昔の家はそれでよかったかもしれませんが、今の技術では、断熱性能もある程度数値化されており、外の気温が何度だった時に家の中が何度になるかというのがわかるようになっていきます。素材の熱伝導率によって、外壁に必要な断熱材の厚さが検討できるのです。土壁で断熱材なしでいくなら、四十センチくらいの厚みがないと既成の断熱材と同じ性能を発揮しないことがわかっていました。

ところが、「自然素材だけでつくる」というコンセプトをなにより最優先にして、工業製品であるスタイルフォームやロックウールみたいなものはなるべく使いたくないと言って結局、壁には断熱材を使わなかったのです。木の粉からできた断熱材などもみつけてきたのですが、それも採用されず、純粋に木と土だけでつくるといことがとても重要だったのです。

結果、工業製品としての断熱材をまったく使わなくても、快適に過ごせるとのことでした。もちろん、多少は夏暑かったり、冬寒かったりすることもあるらしいのですが、それは想定範囲内であり、それよりも自然素材だけの木と土の家にこだわりたいおかげで空気の澄んだ家で気持ちよく暮らすことができていると、喜んでいました。

これは一例に過ぎませんが、建築家がクライアントといかにして対話を重ね、最良の選択ができるのか、魅力ある家づくりを実践することは決して容易なことではありません。そのためには多くのパラメーターがあり、その中でも、見えない美しさに関わる優劣がつけにくい要素に対して、視野を広くもち、どれだけ意識的でいられるかを、大事にしたいと思っています。そして、そうした多くのパラメーターの優先順位を考慮しながら、上手に組み合わせたグラデーション〔構成〕の中から唯一無二の空間が生まれるのではないのでしょうか。

（光嶋裕介「建築という対話 僕はこうして家をつくる」より 一部表記・体裁を改めた）

問一、——②「何か見えない法則のようなもの」とありますが、「土壁」「料理」に共通する法則を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から七字で抜き出して答えなさい。

作業すること

問二、——④「そうした自然の動きも含めて家を構成しているモノが美しいと感じられるようになりたいと思っています」とありますが、その理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然素材による建築にこそ本当の美しさが表れると思っているから
- イ 建築物には目に見えない美しさがあるはずだと強く思っているから
- ウ 人工的な素材ではある程度の感動しか得られないと思っているから
- エ 職人たちの労力は目に見えるものでしかないと思っているから

問三、——⑥「そうした不可視なもの」とありますが、これは「土壁」の場合は何にあたりますか。文中から七字で抜き出して答えなさい。

問四、——⑦「本当の美」とありますが、筆者が考える「本当の美」にあてはまるものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 素材を複雑に組み合わせでつくった美しさ
- イ 長い時間持続可能な美しさ
- ウ 数値化できない美しさ
- エ 見た目の良さだけにこだわった美しさ
- オ 五感のすべてに訴えかけてくる美しさ

問五、——⑨「亡くなったおばあちゃんが暮らしていた」とありますが、このような要素を筆者はどのように表現していますか。文中から熟語で抜き出して答えなさい。

問六、——⑪「矛盾」とありますが、これよりあとの「矛盾」の具体例をまとめた次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中からは十字、Bは七字で抜き出して答えなさい。

A	で家を建てることと	B	家を建てること
---	-----------	---	---------

問七、——⑫「なるべく自然素材だけに、徹底したい」とありますが、この「お施主さん」がこのように考える理由を、文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問八、家づくりについて筆者はどのように考えていますか。次からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家づくりにおいて基本的に一番重要な要素は、「時間」「お金」「技術」の三つである

イ 魅力ある家づくりのためには、その家を建てる土地の歴史や状況を知ることが大切である

ウ 建築家の役割は、その家を建てる人の思いや価値観を盛り込んだ家を設計することだ

エ 良い家づくりのためには、施主の要望はきっぱりと否定し納得させなければならない

問九、この文章の（中略）の前と後に小見出しをつけると次のようになります。空欄にあてはまる言葉を文中から四字で抜き出して答えなさい。

前 建築物の本当の美しさ

後 家づくりの要素の

問十、本文の展開としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 事例をあげることでも自分の考えをわかりやすく説明している

イ 自分の体験したことに科学的な考察を加えて説明している

ウ 世の中にあることとないことを順番に並べて説明している

エ 実際に起こったことだけを主観を入れずに説明している

問十一、——①「センレン」・⑧「ジュシヤ」・⑩「セイヤク」のカタカナを漢字に直し、——③「放つ」・⑤「注いで」の漢字の読みを答えなさい。

受験番号	
	氏名